

市民公開講座

市民公開講座

市民公開シンポジウム

市民公開講座

共催：公益財団法人在宅医療助成 勇美記念財団

座長略歴

□ 蘆野 吉和

1978年東北大学医学部卒業、1981年東北大学医学部第一外科入局、1985年福島労災病院勤務、2002年日本緩和医療学会理事（-2012年）、2005年十和田市立中央病院院長、2010年東北大学医学部臨床教授（-2013年）、2013年青森県立中央病院医療管理監（在宅医療担当）、2014年12月社会医療法人北斗地域包括ケア推進センター長等

【役員等】

NPO法人日本ホスピス・在宅ケア研究会理事長、日本在宅医療学会理事日本死の臨床研究会常任世話人、在宅医療推進会議（国立長寿医療センター）委員

演者略歴

□ 徳永 進

鳥取県生まれ。京大医学部卒。

鳥取市内でホスピスケアの有床診療所「野の花診療所」を始め今年で15年。1982年『死の中の笑（え） 笑み』（ゆみる出版）で、第4回講談社ノンフィクション賞を受賞。1992年、第1回若月賞。著書には『隔離』（ゆみる出版）、『詩と死をむすぶもの』谷川俊太郎さんとの共著（朝日文庫）、『ケアの宛先』鷲田清一さんとの共著（雲母書房）、と最新刊『どちらであっても一臨床は反対言葉の群生地』（岩波書店）がある。近刊の『在宅ホスピスノート』（講談社）は在宅医療にかかわる人への一冊。

そうだ、在宅育てよう、この町に

徳永 進

野の花診療所

〈病院医療〉って、この100年、人気街道を上がりっぱなし、だったと思う。分からなかった病気の診断が、病院に備わった高度医療器でつくようになった。腹膜鏡、胸膜鏡、内視鏡で、今まで治せなかった病気が治せるようになった。昔にはなかった薬が、病院に届けられ、まずそこで使用され、評価された。多くの人々が、病院で命を救われた。病院はなくてはならない建物として、その中にある科学技術が展開する場として、また薬が有効性を示す場として、住民に支持されてきた。教育の場としても評価を獲得してきた。医者たちが、先輩医師から少しずつ技を教わり、素人から医療技術者として育ってきたのは、〈病院〉があったからだ。看護師も助産師も、病院があったからこそ育ってきた。〈病院〉の役割りは、何層にもなって医療者にも、市民にも恩恵を送り届けた。

そういう歴史を踏まえながら、改めて〈在宅医療〉について考えてみたい。病気の最初から死の時点までの全てを在宅で、という症例はとても少数だ。多くは、〈病院医療〉がその役割りを終えたその後、言わば後半医療としての任務だ。私たちはここで立ち止まって考えてみなくてはならない。あまりにも多くを〈病院〉にまかせ続けたのではないか、〈病院〉に依存してきたのではないか。そのために、自分の足で立ち、手を動かすことで作ることができる何かを失い続けているのではないか。

〈在宅〉での医療やケアは、時に〈病院〉を凌ぐものになっていることを、実践者たちは実感している。技術、薬物の面では引け劣らないし、それ以上に、家族、自然、宇宙との交流、コミュニケーションの深さ、心の平穏さにおいては、〈在宅〉は〈病院〉に抜きん出る。振り返ると、「人民の中へ」や「農民と共に」は、人々を医療施設へ導くことではなく、逆に、医療技術、看護、介護技術を〈在宅〉にいる人々に届けようとする思想だった。

トビが野ネズミ2匹を捕らえ、空へと飛び上がっているとする。100年経って、トビはそろそろ野ネズミ2匹を地へと放そうとしている。空は〈病院〉、地は〈在宅〉。トビは近代社会、2匹の野ネズミは住民と医療者。野ネズミのわれわれは地に戻され、そこでよりよい医療の空間を作っていくことを期待され、そういう新時代へと突入しているのではないか、と思う。〈在宅〉を町に育てること。それは大切な、住民と医療者、お互いの使命だろう。

司会略歴

□ 志藤 洋子

国際長寿センター日本（ILC-Japan）事務局長
日本女子大学文学部卒業後、出版社で編集業務に携わる。ILC-Japanでは、1990年の設立当初から広報・啓発、国際事業等を担当し、2001年から現職。ILCは介護家族サポート電話相談や、認知症への理解と支援を目指す全国キャンペーンなども行って来た。2016年には辻医師らとともに「納得できる旅立ちのために」を企画・刊行。良く逝くために必要なことからの啓発に努めている。

演者略歴

□ 上野千鶴子

立命館大学大学院先端総合学術研究科特別招聘教授、東京大学名誉教授、認定NPO法人ウィメンズアクションネットワーク理事長／社会学者
京都大学大学院社会学博士課程修了。社会学博士。国内外の様々な大学機関で研究及び教鞭を執る。女性学、ジェンダー研究のバイオニアであり、指導的な理論家のひとり。1994年『近代家族の成立と終焉』（岩波書店）でサントリー学芸賞受賞。2012年度朝日賞受賞。
『おひとりさまの老後』（文春文庫）、『おひとりさまの最期』（朝日新聞出版）など著書多数。

□ 秋山 正子

㈱ケアーズ 白十字訪問看護ステーション統括所長、暮らしの保健室室長、NPO白十字在宅ボランティアの会理事長、NPO法人maggie's tokyo共同代表／訪問看護師・保健師
聖路加看護大学卒業後、関西にて臨床及び看護教育に従事。実姉の末期がんの看取り経験時に、在宅ホスピスケアに出会い、1992年より東京都新宿区にて訪問看護に携わる。2011年に高齢化の進む団地に「暮らしの保健室」を開設。住民の健康や介護に関する相談に応じ、地域医療連携にも関与。2012年「第8回ヘルシー・ソサエティ賞」受賞。著書に『家で死ぬこと考えたことありますか？』（保健同人社）などがある。

□ 辻 彼南雄

（医）互酬会 水道橋東口クリニック理事長・院長、（社）ライフケアシステム代表理事、NPO法人高齢者を支える学際的チームアプローチ推進ネットワーク（ミシガンネット）理事長／医師
北海道大学医学部卒業後、大学病院等で臨床に携わる。在宅医療とケアの先駆者、ライフケアシステム創設者である佐藤智医師の著書に感銘を受け、東大病院老年病科の職を辞して1990年より佐藤医師の下で在宅医療を学ぶ。東京大学医学部老年病学・公衆衛生学教室非常勤講師。2015年「第4回杉浦地域医療振興賞」受賞。著書に『家庭医が語るシニア世代の不健康管理』（共著、一橋出版）などがある。

自分らしく旅立つために

人生90年、100年時代の「死」は、懸命に生き抜いた先に待つ「ゴール」と言えるのではないだろうか。

住み慣れた場所で、様々なサポートを受けつつ暮らしを営み、老いによる障害や病と折り合いをつけながら、人生の最終章をひたむきに生きて、自分らしく旅立つ。
まさに良く生きて、良く逝くために必要なものは何か。

おひとりさまシリーズで「在宅ひとり死」の可能性を徹底的に追求した、行動する社会学者上野千鶴子氏。

日常と切り離された「病や死」を、暮らしの中に取り戻すことを目指し、地域に開かれた相談窓口や支え合う場所作りを進める、訪問看護師・保健師秋山正子氏。

在宅医療を可能にする訪問診療をいち早くシステム化し、在宅医学を確立した佐藤智医師とともに、30年近く在宅医療に関わり多職種チームでの総合的アプローチを推進し、数多くの看取りも経験してきた医師辻彼南雄氏。

それぞれのお立場での思いや提言をお話いただきながら、私たち一人一人が自分らしく旅立つために大切なことは何かを、ともに考える場にしたいと思います。